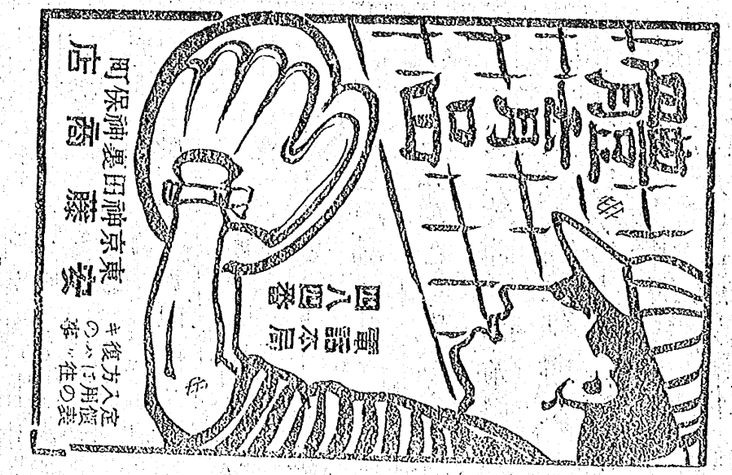
慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	物価名義雑考
Sub Title	
Author	福田, 徳三
Publisher	三田学会
Publication year	1910
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.3, No.5 (1910. 5) ,p.505(1)- 522(18)
JaLC DOI	10.14991/001.19100515-0001
Abstract	
Notes	論説
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19100515-0001

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

廣告主へ御注文の節は三田學會雜誌廣告に依る旨御附記を望む



消毒牛乳

搾取所 麻布區富士見町一六同支店

弊店儀年來斯業に從來し御引立を以て年に月に隆昌に赴き奉感謝候右御禮の爲め

小川牛乳店

塾員幷に熟生諸賢には特に品質を選び迅速に配達可仕候間倍舊御用命の程願上候

搾取所 府下下澁谷一六四〇

賣店 芝區新堀町三十一番地（芝一五八三）

三田學會雜誌 第參卷第五號

論說

物價名義雜考

福田德三

小引

予は兼てより日本、支那に於ける價値思想の發達を知り度しと思へり。今茲に掲ぐる一編は誠に未熟杜撰のものにはあれど、年來學の山に分け入る山口の栞にもと書き集め置きたるものゝ中より試に取り出し、山崎博士の新論に關連して考を立てたるものなり。恩師宮崎博士には種々の垂教を辱ふしたれどもそは續論の部に於て言ふ可し。此編丈けは全くの我流論なり。看る人の諒察を乞ふ。

『物價』なる語は我邦經濟學者の一般に用ゆる所にして、また實際上に慣用せらるるもの也。此頃敬友山崎博士は我邦多數の學者は此語を用ゆるの道を誤るものなりとし近く法學新報本年二月號に其事を論せられたり。今一節を引かんに、

『物價なる語の用法に至りては首肯し難きもの多しとす……「物價とは貨幣を以て表示せらるゝ價格にして米一升の物價は金二十錢なり」と云ふの類多きを占め或は「物價」と市價とを同一の義に解するものありこれ果して物價なる語を適當に使用せるものなるや否や物價なる語の從來の意義は果して斯の如きものなるや否や疑なきを得ず。右に掲ぐる如く「貨幣を以て表示せらるゝ價格」と云ふは思ふに獨逸經濟學者の所謂 Geldpreis に當るものなるべし果して此推定にして誤なくんば寧ろ貨幣價格と譯するを以て妥當なりとす……讀んで字の如くに解するときは貨物の價格なるが故に穀物の物價と云ふは穀物の貨物の價格と云ふに外ならず（福田問。讀方を代へて穀物で。ふ。貨物の價格と讀めば如何）單に重複に陷るのみならず其意義の捕捉に苦しまざるを得ざるなり。……物價は複數の場合にのみ用ゐらるゝ語の一例なりとす例へば物價騰貴と唱ふるは通俗に所謂諸色高直と略ほ其意義を同ふし數多の財貨の價格上りたるときに用ゐらるゝものにして米價のみ上騰するも物價騰貴すと云はざるなり……物價なる語は「ケルドプライス」の譯語としては全く適當せず又市價と同一視すべきに非ず從來の意義を以てすれば恰も「プライセス」に該當するものとす。』（以下略）

予も國民經濟原論に於て Geldpreis を物價（ねだん）と譯出し、加ふるに物價（市價）とさへ重ねたれば（但し此兩者は判然區別す可きものなることは二四八頁及二五一頁に特言し置きしも）山崎博士の所謂『本邦多數』の一人にして誤れるも甚しきものなり。予は山崎説に從ひ『物價』は複數にのみ使用し單數に用ゐざることゝするを便なりとし、今日以後實行する心得なるが、博士が從來の意義云々と言はれたるに因みて、少しく溯りて物價なる語が從來如何に用られたるかを調べ試みんと欲するものなり。

先現今流布の辭書類を見るに

言海	ぶつか（物價）	賣買の物の直段
日本大辭林	ぶつか（物價）	もののあたひ、もののねだん
ことばの泉	ぶつか（物價）	物のあたひ、直段
辭林	ぶつか（物價）	財物と貨幣との交換の比例、卽ち財物の市價

等とあり。辭林のは山崎博士の所謂「本邦多數の經濟學者」の用法と全く同じく、物價と市價を同視するさへ異ならず。これは著者が西洋學問をしたる人だけありて、經濟學の書を參考せられたるものなる可ければ姑く別論として、大概氏も、物集氏も落合氏も『物價』を『諸色』と同樣に複數に解したる模樣見えず。殊に物の直段 Waarenpreis と云ふ意に解するが如くなれば、何れに考へても山崎君說に援助を與ふるものならず。

さて本邦多數の學者が物價なる語を Geldpreis の意に用ゆるは何れの頃より始りしやと云ふこと一考を要す可し。本邦にて西洋式經濟書の最も古きは何書なりや予は深くは知らざれども慶應三年刊行の神田孝平氏の『經濟小學』等は必ず其一ならんと思へり。仍て其書を繙くに左の說を載せたり。「但し此書は飜譯なり自序に曰く『此書原本は英國義里士氏の著はす所にして……和蘭文士某見て以て初學に益ありとし蘭文を以て之を譯す是れ卽ち我重譯の原本なり』」

上卷　二十二葉　表

『品位』

世人作る所の物品を交易せんとするに當て此物何量を以て彼物何量に易ふべきといふことを論ず之を諸物品の位を論ずと云ふ其法先づ此物の量を定め而して後に之に易ふべき彼物の量を定む然る時は彼物の量を名けて此物の位と云ふ假令は沓一隻を以て麵麭四箇に交易する時は麵麭四箇は沓一隻の位なり』

同卷　三十二葉　裏

『物價低昂

（前略）前に云此物の量を定め而して後之に易ふへき彼物の量を定むれは彼物の量は卽ち此物の位なりと是れ物を以て物に易ふるに就て云ふなり若し今一物に易ふるに貨幣を以てすれは其貨幣を名けて一物の價と云ふなり是故に物の價昂かれは貨幣の位其物にて計れは昂るは一定の理なり……其物にて計れは降り、物の價低けれは貨幣の位故に物價に低昂あれは其物の眞豐眞歉を信することを得へし』

（○は余が附けたり）

右にて見れば神田氏は疑もなく物價を單數の Geldpreis の意に解したるものに

して、山崎君の所謂『多數』中の巨壁と云はざるを得ざる可し。神田氏は和漢の學に造詣深きは人の普く知る如くなれば、決して我々が思ひ付き次第譯語を下すが如きと同一の談にあらざるや多言を要すまじ。殊に山崎君が「米の貨物の價格」と字面より下されたる非難は神田氏の「ヲーソリテー」を以て對抗するを得可きか。(此事は後に再論す。)

右丈けの處にて見れば『本邦多數』の學者が物價を單數に使用するは必ずしも一概に誤謬と斷じ去るを得ずして山崎説は將來に向ては有力なれども、過去に付ては必ずしも然らざるが如し。

然るに物價なる語は神田氏に創れるにあらず又た西洋語の飜譯にもあらざること山崎君の云ふが如し。故に溯りて維新前の學者が如何なる意味にて此語を用ゐたるかを一考し見る可し。

先づ辭書の類を尋ぬるに東雅、倭訓栞、俚言集覽の類には物價の字なし(關連語の事は別論に於て考ふ)。然らば經濟上の事柄を論じたる雜書は如何と云ふに此語を用ゆるもの尠からずあり。試みに机邊の一二本を亂抽するに

貨幣秘錄(著者を知らず)

『金銀は諸物を運輸するの具なり、故に諸物に金銀の數位相對して其平を得るを至極とす、往古金銀乏しかりし世には、其貴くして諸物賤しき事を知る可し當時物價の騰貴を以て獨り其罪を金銀の品位輕重に歸して多少の論に渉らざるは、いまだ其實を盡さゞるの論なり、諸物の貴くなれるは金銀の多きによれり、……諸物の賤價なりしは……今の金銀多くして諸物の貴價なるは……(以下略)』(溫知叢書第五編二十九頁)

太宰純　經濟錄(經濟雜誌社本によりて頁を揭ぐ)

食貨篇中

百六十六頁に

『憲廟の世元祿年中までは米價猶賤くて、東都の米價金一兩に石二三斗、憲廟奢靡を好みたまひし故に物價稍々貴くなりて士人困めり』

百九十三頁

『正德三年文廟薨じたまふ時、大臣を召して金幣を慶長の故に復すべきこと

を顧命したまふ、是より民間に彌々乾金の直を減じて物價を貴くす』

正司考祺　經濟問答秘錄　卷二

十九丁

『商賈は假構の物を以て人を誑を主とし物價は口から出次第に賣り……

……民俗利欲を一にすれば信義を失ひ物估高騰となるは古來皆然り中華嶺右は民風淳撲にして物價甚賤し……其後漸々風俗衰ゆれば物價大に高なるに及んで云々』

佐藤信淵　經濟要錄　卷七

四十二丁

『先つ財用の融通を宜くし自國他國の貨物を多く湊會し、舟車の運送を便利にして、遍く諸國の物價を校り審かに其輕重を考へ、多き處の品を少き處に輸り有る所の物をば無き處に移し云々』

新井白石　建議（國書刊行會本白石全集によりて頁を掲ぐ）

全集卷六

百九十三頁

『下にしては人民の怨み候て物價もようやく增し、上にしては天地の心も怒り候て云々』

二百四十六頁

『金銀の法弊れ幷物價高くなり候事

元祿年中金銀の法を改められ候事其品を下され候上は可然事あるまじきは論ずるに及ばず候……況んや又萬物の價は金と銀とを以て易候所につきて相定る事に候上は金銀の品相みだれ候に就ては萬物の價も平かなるべからざる事これ又あやしむにたらず候こゝを以て金銀の品におのづから其高下ありて萬物の價これによりて高下する事の由をこゝにしるし候』

三浦梅園　價原（帝國圖書館藏寫本　龍本誠一氏藏右複寫本には）

（一）此故に金銀多ければ物價貴し金銀少ければ物價賤し

（二）然るに今三幣愈々麁惡金黃ならず銀白からず新鑄の錢鐵を用ゆ若痛く擲て

ば碎く物價歳々に增す

(三)近年錢は鐵となり銀は鈔となる程物價騰躍する者云々

(四)……富家兼併せず貧民本業に歸し遊手勤むる所あり餘夫より良民に左右して餘事に勤むる所あらば本業他業を交たとらす物價高下ありとも粗定準の有るべきあらん

(五)今の貧民一年は本業に走り一年は餘業に赴く故に物價猷動して定らず

(六)今奴婢諸物價の貴賤事微なりといへども關係小にあらず

(七)予此書成て後桂秋齋の間語を得て讀むに足利の比の物價を載せたり

(右通篇中に散見する所、此他にも物價の語用ゐあるやも計られざれども先は右七箇所に盡きたりと信ず)

其他經濟隨筆、經濟總論、經濟辨、政談の類を漫りに繙き見たれども、物價の語見當らず。

次に古事類苑産業の部卷八には物價の目ありて

盡簪錄(物價之貴前代未曾有也)守貞漫稿(大凡物價文化文政中に比すれば嘉永安政

には一倍となり)東湖隨筆(江戸物價の權を制せんとせば大坂にあり)諸問屋再興調(物價引下方之儀云々)等より摘錄しあり。

右は僅かに手に任せて拾へるものに過ぎざれども、其れ丈けに就て考を下し見るに、多數は山崎説の如く『諸色の直段』の意を以て物價なる語を用ゐるものゝ如くなり。然れども亦た單に『物の直段』即ち Waarenprcis の意を寄するに過ぎざる場合も之れ有るが如し。白石は其建議中所々に『萬物の價』『諸物の價』と云ひ、時には『物の價』と云へり。物價なる語は萬物又は諸物の價の略なる場合多けれども、又た物の價の略なる場合もあり。春臺の經濟錄(經濟雜誌社本二百八頁)には『諸色の貨物の價』なる一句あり。(百九十三頁)には『諸貨の價』なる句もあり。されば維新前の學者の用法は山崎説に取りて大に有力なるものとす可きか。兎に角一般には『諸色直段』と云ふを常としたるものゝ如し。

仍て更に一段溯りて令義解を見るに、職員令內藏寮の所に價長二人とある下に掌平物價市易とありて、謂猶言評價直而市買也(此條別論に於て再び考を述ぶ)と注せり。仍て試みに其源を知らんとて唐律疏議を尋ぬるに卷二十六雜律の條に(本

邦官板私藏本二十二葉表)

諸市司評物價不平者計所貴賤坐贓論云々

疏議曰謂公私市易若官司遣評物價或貴或賤令價不平計所加減之價坐贓論云々

とあり。 玆にては複數の『諸色直段』と云ふ意にあらずして單に物の價卽ち Waaren preis の意に用ゐられたるものなる可し。

然るに手に任せて更らに文獻通考幷に續文獻通考(私藏嘉慶版合編本に據る)卷三錢幣考と卷五市糴考とに就て物價なる語を求むるに左の如きあり。

(一) 往時楮幣多故物價貴今又益以鐵錢不愈貴乎

(二) 慶元中詔以七百七十錢買楮幣一道及買似道當國患楮賤作銀關易之銀關行物價益騰湧楮益賤矣

(三) 按宋史寧宗之世會子壅滯物價湧甚不勝其苦朝廷無如之何

(四) 宛然一買字也銀關行物價頓湧矣

(五) 錢重鈔輕相去縣絕物價騰湧

(六) 市物價騰躍米至石萬錢馬至匹百金

(七) 所在鐵錢遂如邱山物價騰貴

(八) 法既屢易物價騰躍

(九) 以罕見爲寶物價翔騰楮價損折

(十) 令民間通用行之未久物價騰湧至逾十倍

(十一) 況重以物價翔踴視昔何但數倍乎

一より十迄は鐵幣の條にあるものにして皆貨幣の增量若くば惡鑄の爲めに諸物の價の騰貴したることを云へるものにして、物價下落の事一も之を見ざるは注意す可きことゝ思ふ。 卽ち通考の右の條の用法は山崎說の如く物價を諸物價と複數に解するものと云ひて不可なかる可し。 予が以上の考を經濟學研究會にて述べたるとき、中島信虎君は史記の貨殖傳にも其語あり必ず參考す可しと注意を與へられたるに付き、家に歸り燈下匆々私藏の萬曆五年版の史記評林を閲したるに似寄りたる語をも見出す能はずして已めり。 猶再考を重ぬ可し。

然るに通考と同じ題目を取扱ふ漢書第二十四卷食貨志第四の下を通讀するに、

前後の字句右通考に就て擧げたると殆んど同じき處にても物價なる語を用ゐあらざるを見出したり。例へば

通考　市物價騰躍米至石萬錢馬至匹百金

漢書　以稽市物痛騰躍米至石萬錢馬匹百金

（明曆版評林本に據る）

の如くにして、予が一見したる所にては漢書の食貨志上下とも物價なる語を載することなきが如し。

更らに再び溯て九通の藍本なる杜佑の通典に就て物價なる語を尋ねんと思ひ、卷七食貨八の錢幣の條を通讀したるに魏迄を載せたる錢幣上の項には衡者使物一高一下（私藏嘉靖版第二本錢幣上第一葉裏第三葉裏）と物益少而貴（六葉裏）穀貴百物皆貴（十一葉表）百物皆賤（同上）由是貨輕而物貴（十一葉裏等とありて Waare, Commodities（商品貨物）を汎稱すれども物價なる語一も見當らず。宋以降を記したる錢幣下の部にも物なる語は處々に用ゐあり。貨の字も散見す。盜鑄彌甚百物躍貴（三葉裏、三葉表）、頃錢貴物賤（四葉裏等ともありて諸色を汎稱して物と云ふてと疑ふ可きなきのみならず、物價と續けて用ゐたる所あり。卽ち

及大同以後所在錢鐵遂如丘山物價騰貴　（五葉裏）

の一ヶ條あり、其他には無きが如し。猶食貨の漕運、鹽鐵、平準、輕重の部は未だ熟讀せざれば確言はし難きも、物價の語を載すること殆んど之れ無きが如し。（同じ明版部亭知見傳本書目卷六三葉表通典の條に明本有十行二十三字者較李本少錯字とありて右本は十行二十三字本なれば先は錯りなきものと見て差支なからんか、序に流布の石印本文獻通攷には物價騰躍を物踊騰躍等とありて、甚だ憑ひ難きこと石印本卷二第二葉表第三行と私藏嘉慶版正續合編本卷三第五葉表第三行とを比較して知れり。）

次ぎに現時の用法加何と下り來て、參考の爲め清英、英清字典の類を尋ねしに

價

Price, Value.

市價　時價　the market price, the ruling rate.

物

物直所直　the intrinsic or real value of a thing.

Williams, Chinese English Dictionary.

Giles, Chinese English Dictionary.

價　the value of a thing; the price.

英華字典 (Lobscheid, English-Chinese Dictionary.)

Price

價. 價錢. 價銀. 價值

the current price. 時價

the market price 市價. 樂價

Value

價. 價值. 價錢.

等とありて物價の語一も見當らず。

以上甚だ未熟杜撰なる名義の詮索は別に何事をも訓ゆる所ありと惟ふにはあらざれども予は唯之に基て左の考を立て得可きかと感ずるものなり。

(一) 物價なる語は右に擧げたる所丈けに就て見れば必ず複數にのみ限られて單數には用らるゝことなしとの山崎君の斷案は必ずしも凡ての場合に就て云ふこと能はざるが如しと雖も、大體に於て複數に使用する場合

の方多數なるもゝ如くなること。

(二) 物價なる語を用ゆると他の語を以て同一の意を表はすとは多くは筆者の好みによるものにして必ずしも時代に關係なきが如く見ゆること。

(三) 卽ち物價なる名は一般的成語と看做し難かる可きこと。

(四) 物價なる語を用ゐざる時代又は學者にありても、複數の價の概念は存するものゝ如くなること。

(五) 物價なる語を用ゆる場合は勿論用ゐずしても、複數に於ける價値なる概念は多くは貨幣と相對するものとして立てられたるものゝ如くなること、然る場合には『物價』の『物』は獨逸語殊にマルクスが資本論第一卷に用ゐたる意味にてのWaareに當るものゝ如くなること。換言すれば物は錢幣、金銀等と相對峙する一のentityと看做されたるものゝ如くなること(春臺の『諸色の貨物の價』の一句合せ考ふ可し)。錢輕物重とは屢々用らるる對句なり。

右の考丈けにても貨幣と關聯しての(關聯せざるものに就ては予に別に

論あること無論也價値の概念は日本支那にも古くより發達し居たるものゝ如くなること。

乍去此の(五)の考は聊か voreilig なるを免れず。故は物價なる語は一般の成語にあらざれば、此に就て斯く一般の推察を下す可きならざればなり。されば予は進みて一般の成語の二三に就て、更らに日本若くは支那に於ける言語に表はれたる價値思想史の一端を窺ふ必要あるを感ずる者也。仍て稿を改めて價、直等の名義の種々を考へんかと思ひたれども、未だ九通中の關係ある條々並に二十四史中の食貨志の條等すら卒業せざるものなれば、今回は之れにて筆を擱くことゝしたり

(四月末日記す)

殖民及び殖民地の意義

堀切善兵衛

殖民及び殖民地なる語は近來頻りに朝野人士の口にする所となりしも其正確なる意義に至りては尚未だ一定せざるが如し英語の Colony 佛獨語の Colonie は羅典語の Colonia より來る所にして此羅典語はホーム以外の農作地、所領地又は其土地に附隨したる人民の團體を指示したり、されば此 Colonia は北部歐洲諸國に傳はりて Colony, Colonie 又は Kolonie に化したるなりと雖も其本來の意義は母國を離れて他の新たなる土地に於て農耘に從事する人々の團體を意味したりしや知る可きのみ又希臘語の之に該當する文字は Apoikia にして其意義は母國以外の居住地或は遠隔の地に存するホームの義に用ゐられたるなり。されど斯る古語の意味より推論して今日の所謂殖民又は殖民地の定義を定めんと欲するは頗る無理なりと云はざるを得ず何となれば今日は希臘羅馬の時代を去る既に遠く從て殖民又は殖民地なる語も必ずしも昔日と同一意味に使用せざるの常なればなり、